『向島の豊かな自然と生きもの』

第55回　「標本箱」

昆虫標本を作り始めた頃は永く手元に置いておく気ではなかったので、プラスチックコップやプリンカップに、標本にした虫を入れて眺めては楽しんでいた。

見えやすく(見えやすいことが大事)微細な虫を守るためにカップ標本箱を手作りしていたが、保管場所も狭くなり、博物館や昆虫館で本物の標本を見るたびにちゃんとした標本箱が欲しくなった。

高価な買物になったけれど、虫達を移して並べ替えた時、素人が集めた虫ではあるけれど実にしゃんと！立派に見えた。

虫を採るのも苦労が多いけど、それらを苦心して仕上げた標本は良い状態で保存することが最も大切なわけで、これを持続するには保存に適した箱が要る。

標本箱の中の虫が、生物的・物理的・化学的な影響(害虫や地震、湿気など)を受けないようにできる限り避けなければならず、桐材製では湿度が高い時は湿気を吸って膨張してわずかな隙間がふさがるという利点が有り、軽い桐材製印籠型標本箱が適している。

標本箱の底にはポリフォーム板を貼り、昆虫針を真っ直ぐに刺すことが出来る。ガラス蓋箱は、通称ドイツ型標本箱と呼ばれ、サイズも決まっているようで、私はこれを使っている。

ほかにも標本箱としていろいろと有るようで、何を標本管理保存するかで最も適した箱を選ぶ必要がある。さらに多くの標本箱を収納するために、タンスのような形式で引き出し状になっている標本タンスが市販されており便利である。

このように虫を守る専用の箱があるが、それでも防虫・防カビのために標本箱の中には防虫剤・防腐剤を入れている。虫愛好家の中にはさらに工夫や設備を施し、地震や火事から守る部屋を作っている方もいるらしい。

もちろん、国立や県立などの博物館にはそういった設備が整っていて、あらゆる昆虫、カビやキノコ、植物、鉱石、動物のはく製や、乾燥保存が出来ない生き物は液浸標本などにして収められている。

自然界で普通種であっても希少種であっても、標本としてとても大切なものが有り、虫ケラ・虫のくせに…と侮ることなかれ、とても多くの人や経費をかけて整理されて管理されています。

～　花と鳥と昆虫と海辺に遊ぶ　～

つるかめクラブ　江頭 正